いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

舟運・筏・川遊び 堀川のにぎわい

白鳥の御材木場

白鳥御材木場が置かれたのは、木曽山が尾張藩領になった元和元年（1615）頃と言われている。当初は国奉行が材木奉行を兼任していたが、寛永６年（1629）には専任の材木奉行が置かれた。

施設も順次拡張され、寛文 13 年（1673）には 9,394 坪、幕末には 23,900 坪になっている。現在の白鳥庭園の北附近から国際会議場付近までの堀川両岸が御材木場であった。

熱田神領字入図　文化元年(1804)出来

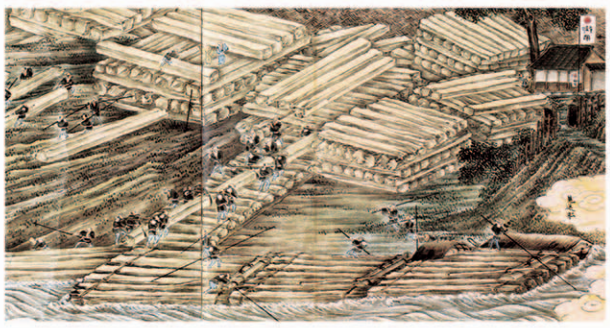
材木奉行の配下には、手代（下級の役人）が 18 人、足軽が 17 人、手木の者（捕吏）が 27 人、番人が 21 人いた。手代や足軽は橘町の手代屋敷に住んでいたが、延宝３年（1675）に手代２人と足軽７～８人が熱田に住むようになり、享保 11 年（1726）には橘町の手代屋敷が廃止されている。

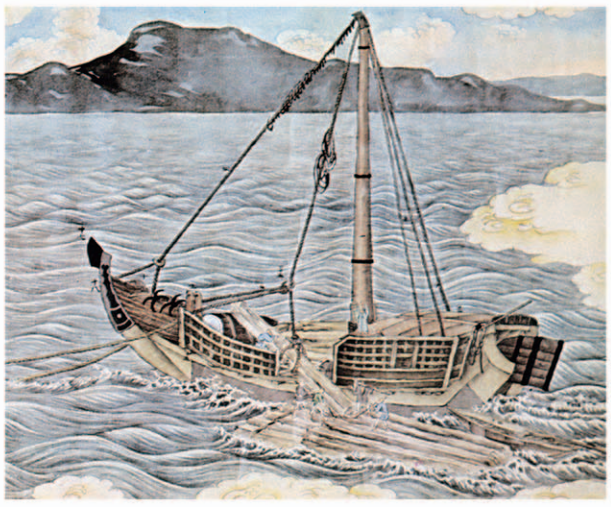
御材木場に着いた筏は解体され、木材は積み上げて保管された。

寛文５年（1665）から安永４年（1775）までの 110 年間の本数は、榑木（くれぎ）（板材）などの小物も含めると1億 7641 万本余との記録があり、平均すると年間 160 万本という膨大な数である。

藩が必要とする木材を使い、余剰材は材木商人に払い下げられ、再び筏で堀川をさかのぼり城下の材木三ヶ町へと運ばれていった。

また、江戸などへ送る木材は、熱田の少し沖合で大船が係留できる保田沖（現：名古屋港一帯）で船に積み込まれて運ばれていった。


白鳥に着いた筏は解体して保管（木曽式伐木運材図会）

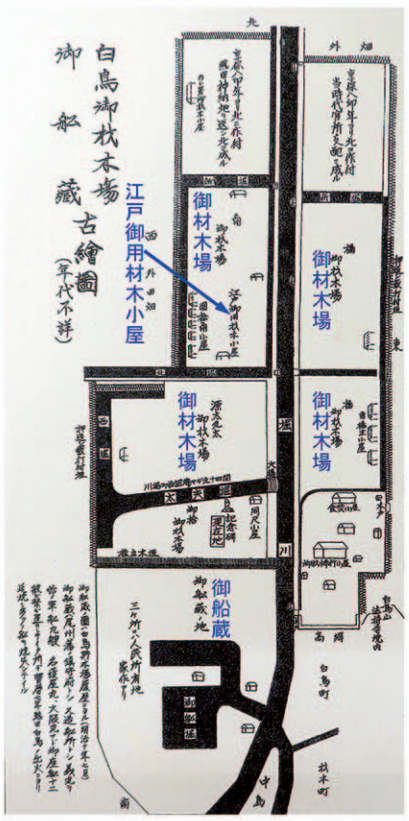

船に積んで江戸などへ運ばれる木材もある（木曽式伐木運材図会）

幕府の御材木場

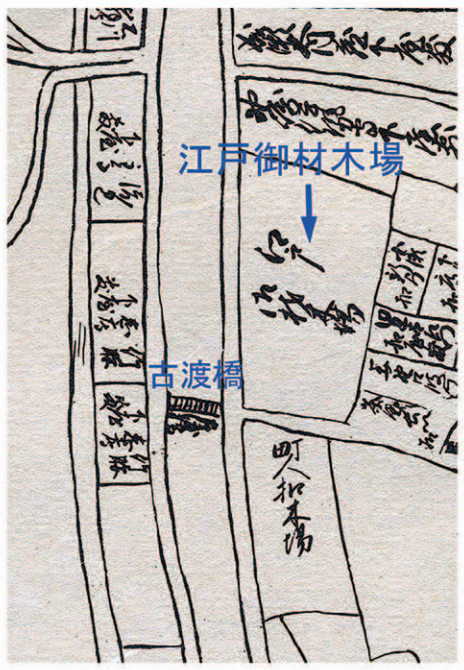
飛騨は金森氏が藩主の高山藩であったが、元禄５年（1692）に幕府が統治する天領になった。木曽と共に優良な木材を産出し、それらは北方へは神通川を流して越中岩瀬湊（現：富山市岩瀬）へ、南方へは飛騨川から木曽川を経て白鳥へ運ばれ、さらに江戸へと送られた。

中継地である名古屋には、堀川沿いに幕府の御材木場が設けられていた。

場所は時代により変遷しており、享保～元文（1700 年代前半）の地図には古渡橋北東の橋詰めに「江戸御材木場」と書かれ、天明４年（1784）の図には白鳥にあった中島に「飛州御材木場」と記入されている。

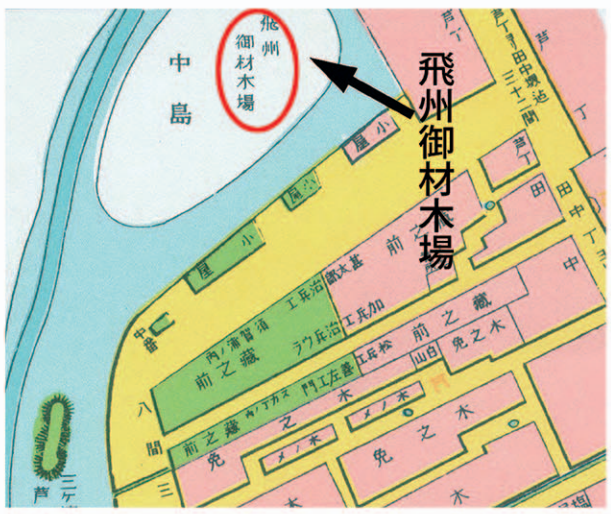


白鳥御材木場御船蔵古絵図
時代不詳（享保8年(1723)以降）



尾張名古屋大絵図
享保年間(1716～36)

名古屋図
元文3年(1738)



熱田三ケ浦町並之図　天明4年(1784)改